

優秀賞

いつまでも、ずっとずっと

須磨学園高等学校 1年 大橋 佳帆

私には大好きな祖母がいる。みかんが欲しいと言えばダンボール箱いっぱいのみかんを送ってくれたり、運動会の応援に来てくれたりする、大好きな大きな祖母。

そんな祖母は、認知症だ。数年前の夏、祖母は私の名前を忘れていた。おかしいと思った。どこかよそよそしい態度は、まるで別人だった。大分ぼけちゃったみたいで、と言う母の言葉に、無性に悔しくなった。そんなわけないでしょう、久しぶりでちよつと思い出せなかっただけでしよう、そうだよね、おばあちゃん。いつもと変わらない祖母の家の中、祖母だけが私に背を向けているみたいで、ひどく泣きたくなった。

ほどなくして祖母は入院し、時折届くメールも来なくなった。コロナ禍で会うこともできず、最後に会ったのは四年前。そのときは、実の娘の母のことですら覚えていなかった。私と祖母とを結んでいた糸が、ぶつんと切れたような感覚になった。祖母と会っている間、ずつとくちびるをかんていた。

家に帰ってきてから、私は部屋をそうじした。気を紛らわせてしまいたかった。すると引き出しの奥に、小銭入れを見つけた。ひっぱり出して、息を飲んだ。祖母がずっと前にくれた小銭入れだ。チャックを開けると、なつかしい祖母のにおいが私の胸を押しつぶした。沢山の思い出が脳裏に浮かぶ。あなたとメルをするためにパソコン教室に通っているのよ、あなたが一番の孫だからね。暑い夏の日、胸がうんと熱くなった祖母の言葉を思い出した。どんな祖母でも、どれだけ背を向けられても、私の祖母への思いは変わらない。

ぜったいに忘れてなんかやらないからね。いつまでも大好きでいてやるんだからね。

窓から見える木々は淡く色を変え始めていた。きつともう秋になって、冬がくる。それでも、どれだけ経つても、私はおばあちゃんが大好きなのだ。